

青木邦子教授のご退任にあたって

御 堂 岡 潔

青木邦子教授は東京女子大学とたいへん深い縁をお持ちの先生である。1956年4月に東京女子大学短期大学部の国語科へ入学、1957年に文理学部の心理学科2年次に編入学され、まず、学生として、5年間を東京女子大学で過ごされた。その後、東京都立大学の大学院に進学された後、1966年4月には、文理学部心理学科の助手として、東京女子大学に戻ってこられた。

6年後の1972年4月に短期大学部教養科の専任講師になられ、短期大学部で16年間、心理学関連の科目で教鞭をとられた。1988年に短期大学部が現代文化学部へ改組された際には、現代文化学部の教授としてコミュニケーション学科に所属し、心理学、パーソナリティ論に関わる講義や演習を担当された。卒業論文のご指導をなさるにあたっては、安易に妥協せず、厳しい姿勢をくずされない先生でもあった。

文理学部心理学科の助手になられたときから数えると、33年間の長きにわたって、東京女子大学の教育に携わってこられたということになる。学生でいらした5年間を加えると、実に38年間、東京女子大学と関わっていらっしゃることになる。

さて、青木先生のご専攻は、心理学の中でも、発達・教育心理学という領域にあたる。大学院にいらした頃から現在まで、特に深く研究をしていらしたのは非行少年についてで、そのパーソナリティや情緒、親子関係、学校観・学校生活観などの特徴を、対照群（一般の少年）との比較において明らかにされてきた。近年、青少年非行が大きく取りあげられ、いじめの問題が大きく取りあげられたり、非行の低年齢化が取り沙汰されたり、学校教育と家庭教育のはたす役割などについての議論がおこなわれたりしているが、青木先生が、およそ30年間にわたって一貫して追及してこられたご研究は、非行の心理学的要因について重要な基礎的データを提供するものといえる。

また、1990年代に入ってから、「高齢化社会と女性」という問題について、精力的に調査研究を実施されている。その際、青木先生は、特に高齢期の女性の「自立」と「老後観」に焦点をあてて論を展開されている。『論集』第44巻2号掲載の「老年期に対する態度」という論文の冒頭で、青木先生ご自身がいみじくも書かれていらっしゃるように、「自立」や「老後観」は「極めて個人的な事柄のようでありながら、実は老人福祉政策の正否に関わる」重要な問題である。後述するが、この研究をなさっていたのは青木先生がたいへん多忙な日々を送っていた頃で、その時期に、新しい大きなテーマに取り組まれ、成果をあげられたことに脱帽せざるをえない。

上の二つの系統のご業績が、青木先生のご研究の中の大きな柱であると筆者は拝察しているのだが、もちろん、それだけではない。『心理学における事実と虚構』『オルポートとの対話』といった、心理学において古典的名著と呼ばれている書籍の翻訳に携われたり、『パーソナリティの心理学』『現代心理学入門』といった概論書・入門書を執筆されたり、また、最近では、「障害者と統合教育」という今まさに問題となりつつあることがらについて論文をまとめられたり、ご業績は多岐にわたっている。

ここまで、青木先生の教育と研究の側面について書かせていただいたが、学部運営についても述べないわけにはいかないであろう。筆者は1988年に現代文化学部ができあがったときに東京女子大学に着任したので、それ以前のことは、残念ながら存じあげないが、短期大学部の運営においても、また、短期大学部から現代文化学部への改組にあたっても、大きな役割をはたされたと信じている。現代文化学部開設以来11年間、たいへんな重責を担われ、それを確実に果たしておられたからである。

まず、現代文化学部が開設された最初の2年間、コミュニケーション学科の主任をなさり、新しい学科の基礎を作りあげる際に、中心的役割をはたされた。今でこそ、日本の他の大学においても、「コミュニケーション学科」という名の学科や「コミュニケーション」という言葉を冠した科目も増えているが、1988年当時はいささか少なく、まさにゼロから始めた学科作りであった。そこに集った教員の顔ぶれも多彩で、議論好きな者が多く、さまざまな議論が飛び交っていたことを覚えている。その論争が学科の活気へとつながっていったわけであるが、その中で出たさまざまな意見をてきぱきと調整され、具体化されたのが、青木先生であった。

以来、ほぼ毎年度、教務委員長をはじめとして、学部運営に関わる重要でかつ時間とられる激職を担ってこられた。この期間は、東京女子大学全体としても、また、学部・学科においても、さまざまな改変がおこなわれたたいへんな時期でもあった。牟礼キャンパスから善福寺キャンパスへの主校地移転（キャンパス統合）、新しい学部の諸制度の策定、社会人編入学・学士入学の導入などの入試制度の諸改革、学科のカリキュラム改訂等々である。これらにあたって、青木先生は、多言を用いず、ご自身の役割を着実に果たしておられた。「言葉」ではなく、「行動」の人であった。

さて、このように、教育・研究に加えて、大学の運営にも大いに貢献された青木先生であるが、同時に、別のお仕事もなさっておられた。家庭裁判所の調停委員という、社会的にたいへん重要なお仕事である。いわば2足の草鞋をはいていらしたわけだが、大学でいつも大忙しで動いていらしたのに加え、調停委員という神経の疲れるであろうお仕事をなさっておられたことに、心よりの敬意を表したい。

この調停委員のお仕事は、これまでは兼務していたこともあり、年に数件程度のご担当であったとうかがっている。今回、38年間にわたって深く関わってこられた東京女子大学を退職なさった後、調停委員のお仕事に本腰を入れて取り組まれるとのことである。この第二の人生で、存分に力を発揮されることを願ってやまない。